令和２年度

浜田市内遺跡発掘調査報告書

浜田城下町遺跡（殿町 78 番地２）

2021 年 3 月

島根県 浜田市教育委員会

序

浜田市教育委員会では市内の遺跡を確認するため、平成11年度から国庫補助事業を受けて市内遺跡の発掘調査を実施しています。平成18年度からは市町村合併に伴い、旧那賀郡（金城町・旭町・三隅町・弥栄村）も含めた新浜田市を対象として事業を実施しています。

本書は、平成30年度・令和元年度に実施した埋蔵文化財の調査に関わる成果を記録としてまとめたものとなります。本書が学校教育や生涯学習・開発事業との調整などひろく活用され、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、発掘調査等に際しまして御協力を賜りました地元の皆様、島根県教育委員会をはじめとした関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和３年３月

浜田市教育委員会

教育長　石　本　一　夫

例　　言

1　本書は浜田市教育委員会が平成30年度・令和元年度に国庫補助を受けて実施した市内遺跡発掘調査事業の報告書である。事業は遺跡分布調査と台帳整理、試掘確認調査と関連遺物の整理作業を実施した。

2　調査は以下の組織で行った。

調査主体　浜田市教育委員会教育長　石本　一夫

調査指導　島根県教育庁　文化財課

西尾　克己：松江市史編纂委員会 松江城部会長

調 査 員　藤田　大輔：浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事

事 務 局　浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係

外浦　和夫：文化振興課長（平成30年度・令和元年度）

濱見　武士：文化振興課長（令和２年度）

榊原　博英：文化財係長

川本　裕司：専門企画員

小松　真人：主事

3　調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力　浜田市総務部行財政改革推進課

調査参加　岩元　進、岩元　美恵子、小澤　佑介、近藤　浄文、佐々木　邦文

高原　久美子、檜垣　友孝、山中　茂明

4　遺物実測図は基本的に1/4スケールを用いている。

出土遺物、実測図及び写真、台帳類の記録は浜田市教育委員会に保管してある。

5　本書の執筆編集は藤田が行った。

本 文 目 次

第１章　調査の経過…… 1
　第１節　調査に至る経緯と法的手続き
　第２節　発掘作業と整理作業の経過
第２章　遺跡の位置と環境…… 2
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
　第３節　近世から現在までの調査地の変遷
第３章　調査の成果…… 5
　第１節　平成30年度試掘調査
　第２節　令和元年度確認調査
　第３節　出土遺物
第４章　自然科学分析…… 12
　第１節　はじめに
　第２節　分析試料について
　第３節　分析方法
　第４節　分析結果
　第５節　局地花粉帯の設定
　第６節　従来の花粉分析結果との比較・対比と堆積時期
　第７節　古環境（堆積環境、古植生）の推定
　第８節　まとめ
第５章　総括…… 17

挿 図 目 次

第１図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）の位置…… 2
第２図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）と周辺の遺跡（S＝1/20,000）…… 3
第３図　調査地付近の変遷図…… 4
第４図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）調査区配置図（S＝1/1,500）…… 6
第５図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）調査図面（S＝1/80）…… 7
第６図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）出土遺物実測図１（S＝1/4・S=1/2）…… 10
第７図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）出土遺物実測図２（S＝1/4）…… 11

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯と法的手続き

浜田市教育委員会では、近世城下町遺跡の発掘調査が近年増加していることや浜田城下町の範囲とほぼ重複する現在の浜田市街地の開発事案が比較的多いことを受け、浜田城下町遺跡の確認のための試掘調査を平成22年度より随時実施している。

本発掘調査地は、近世の絵図等により浜田城跡の外掘流路にあたると推定されていた。該当地には、長らく公共施設が建っていたが、平成30年８月に建物の解体が実施され更地の状態となった。このため当教育委員会は、上記の方針をもとに、土地の管理者である浜田市総務部行財政改革推進課と協議を実施し、試掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査は平成30年度と令和元年度の２ヵ年実施した。平成30年度の試掘調査時は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったために、調査開始前の文化財保護法に係る手続きは実施しなかった。その後、浜田城跡の外掘遺構が検出されたため、文化財保護法第97条第１項の規定により浜田市長（行財政改革推進課）より平成30年12月３日付け行第135号で遺跡発見の通知が島根県教育委員会教育長宛に提出された。

令和元年度の確認調査では、文化財保護法第99条第１項の規定により浜田市教育委員会教育長より令和元年８月16日付け教文第269号で埋蔵文化財発掘調査の通知を島根県教育委員会教育長宛に提出している。

第２節　発掘作業と整理作業の経過

調査地は前述のとおり、浜田城跡外掘の推定流路上に位置していた。その根拠としては、未だ外堀が描かれている明治12年の「濱田市街之圖」において調査地が外堀上に位置すること、調査地番である殿町78番地２の字名が「縣庁前堀」であることが挙げられる。これらから外堀は調査敷地のどこかに南北方向で存在していたことが推定されていた。ただ、文献史料においては外堀幅の記述はなく、その幅は不明であった。

上記のような状況の下、平成30年度の試掘調査では、敷地内で南北方向の外堀遺構を検出する目的で、外掘流路と直交する東西14m×南北1.5mの調査区を設定した。発掘調査は平成30年９月12日から開始した。調査開始後すぐに調査区東から1.8m～3.3mの間に、解体施設のコンクリート基礎が検出され、人力による撤去が不可能であり、また調査区東端を掘り進めるにも安全勾配確保が難しいことから、調査区東から3.5m程度は表土掘削のみで終了とした。９月下旬には、近代以降の造成土である大･中礫混にぶい黄橙土の掘削が終了し、灰色粘土層が検出された。該当地は明治31年の地図では、水田となっていることから、この粘土層が明治期の水田であると推定しつつ掘削を進めると、粘土層内から東側に面を持った石垣が調査区中央やや西よりで検出された。この石垣より東側は、発掘停止面まで粘土層が堆積している一方で、西側約1.3mは石垣上面レベルで円礫を主とする礫の堆積が認められた。これらのことから、検出石垣は浜田城跡外堀の西側石垣であると認定し、石垣より東側は外堀内、石垣西側の礫層は石垣の裏込であると判断した。ただ、石垣の上部や近世の旧表土については、天端石がないことや裏込が露出していることから、後世に破壊されたと判断された。

現場作業段階の調査成果は、平成30年11月４日に現地説明会を実施し、60名の参加を得た。また調査地は、浜田市街の中心地にあり人通りも多く、調査開始直後から成果を楽しみにしている声が聞かれたため、11月５日から11月９日まで随時調査現場を見学可能とし、159名の見学者があった。その後、

記録作成、埋め戻しを実施し、11月16日に平成30年度の調査を終了した。

令和元年度の確認調査は、昨年度に検出した外堀西側石垣の残存状況の確認を目的とした。南北９m×東西４mの調査区を一部で昨年度調査区に重複する形で設定した。令和元年９月９日から調査を開始し、９月下旬には灰色粘土層に到達し、外堀西側石垣を再検出した。その後、石垣の延長を探りながら南北方向に掘削を進め、延長で6.8mの石垣を検出した。

現場作業段階の調査成果は、令和元年10月14日に現地説明会を実施し、65名の参加を得た。また前年同様に10月15日から10月18日までを現場見学可能とし、53名の見学者があった。その後、記録作成、埋め戻しを実施し、11月21日に令和元年度の調査を終了した。

整理作業については、各年度の調査終了後に遺物の水洗・注記・接合などを随時実施した。遺物の調査指導に関しては、陶磁器関係を中心として平成31年２月25日・26日に西尾克己氏より受けた。

調査の総合的な整理検討、報告書作成については令和２年度に実施した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

浜田城下町遺跡（殿町78番地２）は島根県浜田市殿町に所在し、殿町は浜田川下流の沖積平野である浜田平野に位置する。浜田川の下流部は、近世に現流路に落ち着いたとされ、それまでは様々な流路があったと推定されている。

第１図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）の位置

第２節　歴史的環境

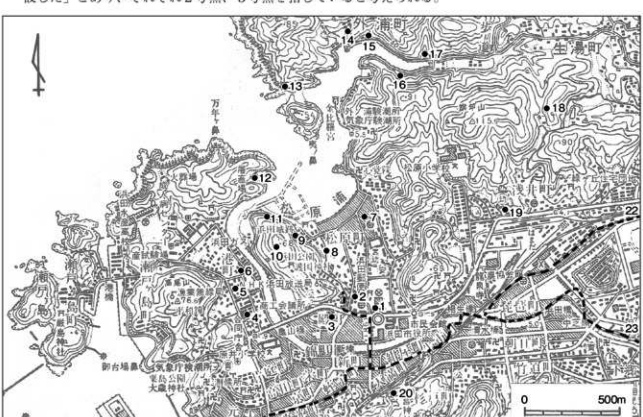
浜田城や浜田城下町が広がる浜田市街地では旧石器時代の遺跡は知られていなく、また明確な縄文・弥生時代の遺跡も確認されていない。ただ、浜田城跡では磨製石斧が表採され、弥生時代後期の土器が数点出土している。

古墳時代の遺跡としては、夕日ヶ丘古墳（３）が浜田城跡の南西側にあったとされる。現在は消滅しているが、石組があったとの記録がある。また、浜田城跡の東麓では古墳時代後期の須恵器や土師器が一定量出土しており、集落の存在がうかがえる。

古代から中世にかけては那賀郡小石見郷にあたり、式内社の天豊足柄姫命神社が殿町に所在するが、古代の遺物が出土する遺跡は確認できない。中世の遺跡は、中世山城として堀切が確認される三重山城跡（20）があり、浜田城跡の北側にも中世城郭の痕跡が指摘されている。

近世になると、浜田城を中心に城下町が形成され、浜田川の南側に山陰道（22）がはしる。浜田川北側には浜田城及び侍屋敷地が広がっており、浜田城下町遺跡が３地点で確認されている（1、2、7）。浜田城下町遺跡（殿町79番地47）では、大手通と侍屋敷の区画と見られる石列及び被熱した陶磁器・瓦を伴う焼土が検出され、焼土は遺物の年代観から幕末の第二次幕長戦争の時期に比定されている。浜田城下町遺跡（松原町268番地５）では、屋敷地後背の空閑地の可能性が指摘され、遺構は検出されなかったが、九陶編年肥前Ⅰ期にあたる胎土目積の肥前系陶器が出土していることが注目される。

一方の浜田川南側には、町人地や寺社地が置かれていたが、発掘調査による遺跡の確認は行われていない。また、城山周辺にはお庭焼きの伝承もあり、いくつもの窯跡が存在しているが、遺跡として明確に確認できるものは少ない。その中でも動木窯跡（12）は、近世後期から昭和34（1959）年まで継続した丸物窯であり、１号窯から３号窯までの３基の登り窯が確認されている。１号窯は、大口手前の作業場と思われる平坦地が廃窯後に墓地にされており、最も古い墓には天保９年（1838）の銘があり、１号窯の下限は天保９年と考えられる。なお、典拠は不明であるが、『島根縣史』などに「文化年中松平周防守康任の家老某濱田外ノ浦及動木にて陶器製造を創む」とあり、文化年中（1804～1818）に製陶が始まったとしている。なお、『石見粗陶器史考』に「那賀郡原井村で、弘化年間（1844～1847）に三沢治八が丸物窯を開窯した」、「浜田市の川下地区で、明治年間に三沢金治が丸物窯を開設した」とあり、それぞれ２号窯、３号窯を指していると考えられる。



1．浜田城下町遺跡（殿町78番地２）　2．浜田城下町遺跡（殿町79番地47）　3．夕日ヶ丘古墳　4．某窯跡　5．三沢窯跡
6．某窯跡　7．浜田城下町遺跡（松原町268番地５）　8．浜田城裏門跡　9．淡島窯跡　10．浜田城跡　11．お庭焼跡
12．動木窯跡　13．日和山方角石　14．西山窯跡　15．内藤窯跡　16．矢島窯跡　17．皿山窯跡　18．森脇窯跡
19．富島窯跡　20．三重山城跡　21．東海篠先生之墓　22．山陰道　23．浜田広島街道

第２図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）と周辺の遺跡（S=1/20,000）

第３節　近世から現在までの調査地の変遷

浜田藩は、元和５年（1619）に当時松坂城主であった古田重治が５万４千石で石見国浜田へ転封し誕生する。浜田城の築城は元和６年（1620）２月に着手、同年11月に地普請が終了、元和９年（1623）５月には城及び城下が整ったとされる。

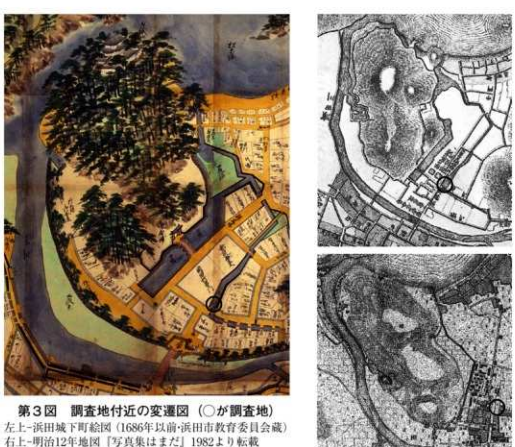
浜田城下町絵図を見ていくと、浜田城跡の外堀は17世紀前半の絵図で既に描かれているため、城下町建設時に巡らされた可能性が高いと思われる。その後、幕末に至るまで外堀は描かれ続ける。なお、文献史料において外堀の詳細な記述は確認できない。

近代となり、明治12年（1879）の「濵田市街之圖」においても外堀は描かれている。しかし、明治31年（1898）の地図では、水田へ変化をしており、明治12年から同31年の間に外堀は埋め立てられたことになる。具体的な時期に関しては、島根県が内務省へ浜田城の堀の埋め立てを伺い、それに関する照会を明治20年５月６日に内務省が陸軍省へ行っており、明治20年５月16日に陸軍省は内務省へ対して差支えない旨を回答している（注１）。浜田城跡には、内堀もあるため、どちらの堀を指しているかは不明であるが、明治31年の地図においても、内堀は規模を縮小させつつも存在しているため、明治20年５月以降に外堀が埋め立てられたと推察できる。

その後、調査地には明治38年（1905）４月に木造２階建ての浜田町役場が建設され、昭和21年（1946）２月の火災まで存続する。浜田町役場後には、時期は不明であるが那賀会館が建設され、昭和40年（1965）の国道９号線敷設に伴い、木造２階建ての那賀会館が再建築された。この那賀会館も平成30年（2019）に解体され、更地となった。

上記のように調査地は、外堀から水田へ変わり、その後は公共施設として利用されてきた。

注１「石州浜田城塁埋立の件」（アジア歴史資料センター　レファレンスコード：C03030227400）



第３図　調査地付近の変遷図（○が調査地）
左上-浜田城下町絵図（1686年以前-浜田市教育委員会蔵）
右上-明治12年地図『写真集はまだ』1982より転載
右下-明治31年地図『写真集はまだ』1982より転載

第３章　調査の成果

第１節　平成 30 年度試掘調査

平成30年度試掘調査は、平成30年９月12日から11月16日に実施した。この調査は浜田城跡の外堀遺構の検出を目的としたもので、推定流路に直交する東西14.0m×南北1.5mの調査区を設定した。

調査地は建物解体後に更地となっていたため、地表面の標高は約1.9mでほぼフラットな状態であった。地表面から約1.2m下までは、角礫が混じる褐色系の土（２～４層）が堆積する。この層は角礫などを多く含むことや色調などから山から運ばれてきた土砂であり、造成土となる。造成の時期は、ガラスやビニールが含まれることなどから、昭和40年（1965）の国道９号線敷設時に那賀会館が再建築された時と推定される。またその土砂は、同時期に国道９号線により開削が進められた浜田城山付近のものと考えられる。なお、２層中では那賀会館のものと思われる陶器製の土管が検出された。また調査区東から1.8m～3.3mの間には、解体施設のコンクリート基礎が検出されたため、２層以下の掘削は実施できなかった。

５層以下は、上層までの土とは一変し、粘質土が堆積し、湧水がある。暗オリーブ灰色粘質土（５層）は、標高0.6m～0.7mで検出され、東側がやや低い。この層は明治期の水田層と推定され、５層掘削中に、調査区中央やや西よりで南北方向の石列を検出した。石列東側の掘削を進めると、石列は東側に面を持つ石材で構成され、２段以上・高さ50cm以上の石垣であることが確認された。

検出した石垣上面の標高は0.5mであり、天端石は検出されなかった。調査地から北西に約100m離れた浜田城下町遺跡（殿町79番地47）では、近世の旧表土が標高1.4mで確認されているため、石垣上部は明治の水田化により破壊されていると推定され、明治の水田層が石垣をまたがって堆積している。また、石垣の下部に関しても、湧水が激しく、根石や胴木などの下部構造の確認はできなかった。

石垣より東側は、５層下に焼土混極暗褐色砂（６層）がレンズ状に堆積しており、二次被熱を受けた瓦等が出土する。６層中の焼土は慶応２年（1866）の石州口の戦いに由来するものと考えられる。７層にオリーブ黒色粘質土、８層に緑黒色粘質土が堆積する。９層は石垣付近で検出したもので、円礫混オリーブ黒色砂層である。円礫の包含量は多いため、外堀が一時、一定以上の水流があったことがうかがえる。

石垣築石より西側では、円礫を主とした砂利層（10層）が約1.3mの範囲で確認され、石垣の裏込と考えられる。10層の背後は、黄灰色砂層（11層）となり、近世の造成土と考えられる。近世の造成土の時期を探るための掘削は湧水が激しかったため、実施することができなかった。

遺物は、５層と７層から瓦や陶磁器類などが多く出土した。また二次被熱を受けた瓦や陶磁器も少量確認され、これらは遺物の年代から慶応２年（1866）の石州口の戦いの際に被熱を受けたものと思われる。

平成30年度の試掘調査の結果、浜田城跡外堀の西側石垣が検出された。浜田城跡の内堀も含めた堀は、近代以降の改変により埋め立てられ、正確な位置は不明確だった。本調査によって、上部は破壊されていたが、初めて堀の石垣を確認するとともに、外堀流路の一部を確認することができた。ただ、外堀の東側石垣は調査の都合上、検出されなかったため、外堀の堀幅は５m以上であることのみが確認された。

第２節　令和元年度の確認調査

令和元年度の確認調査は、令和元年９月９日から11月21日に実施した。本調査は浜田城跡の外堀西側石垣の残存状況の確認を目的としたもので、昨年度に検出した石垣に沿った南北9.0m×東西4.0m

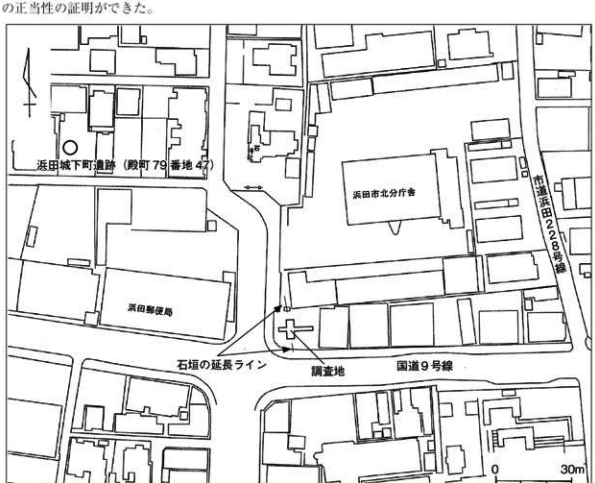
の調査区を設定した。

調査の結果、外堀西側石垣が長さ6.8m、高さ50cmの規模で検出され、層序は昨年度調査と同様であった。なお、直径10cm程度の木杭が３層中で６本検出され、その内の１本は、石垣築石のすぐ背後の裏込に達しており、近代以降の地盤改良杭と推定される。

石垣については、湧水が激しかったため、検出した高さは昨年度と同様50cm程度であったが、所々で３段目の築石を確認することができた。築石で落し積みのされた石材はなく、横置きに積み上げる志向が見て取れる。また、一部に石材の割れや抜けも見られた。築石の法量は、横50cm程度×縦30～40cm程度のものが多く、石材は浜田城跡石垣の主石材でもある流紋岩であろう。積極的に割石加工を行っている痕跡は見られず、おそらく節理面で割れた石材を一部加工するなどして利用されている。なお、築石背面の裏込層も確認され、昨年度同様に円礫を主体としている。

令和元年度調査の成果として、石垣を6.8m長で検出したことにより石垣の軸、つまりは外堀流路の方向がより具体的になった。外堀の南側にあたる調査地周辺における外堀の軸は正方位より西へ10度程度傾いている。この軸をそのまま北に延長すると、近世には侍屋敷地内に立地していた石神社にあたることになる。城下町絵図を見ると、外堀は調査地の北で東へ折れるように描写をされており、今回検出した石垣も北側で東に折れるものと推定される。

また、現在の道で外堀と同じ軸を持つものに市道浜田228号線南側（近世：祇園通り）、浜田220号線北側（福浦通り）、長沢外ノ浦線の松原町内（中門通り）などが挙げられる。それらは以前より江戸時代の通りが残っているものと推定をされており、今回の調査によって、江戸時代の遺構から、その正当性の証明ができた。



第４図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）調査区配置図（S=1/1,500）

第５図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）調査図面（S=1/80）

第３節　出土遺物

出土遺物は瓦と陶磁器が主であり、銭貨などの金属製品は少量である。

第６図１～21は５層出土。１～７は磁器。１は丸形の小碗で、復元口径は9.0cm、復元底径は3.5cm、器高は5.2cmを測る。内面は口縁部に２条、底部付近に１条の線があり、見込みにも文様が描かれる。外面にも文様が描かれるが、モチーフは不明である。畳付のみが露胎である。２は中碗。復元口径は11.7cm。内面口縁部に四方襷文、外面に梅などが描かれている。破面に漆接ぎの痕跡が見られる。九陶Ⅳ期（1690～1780）。３は筒形の碗。畳付のみが露胎で、破面に漆接ぎの痕跡が見られる。４は中皿の口縁部片。内面は如意雲や渦、外面には宝珠や唐草などが描かれている。５は皿の底部片。内面は蛇の目釉剥ぎである。畳付のみが露胎で砂が付着する。高台は厚く陶器的である。九陶編年Ⅱ～Ⅲ期（1610～1690）と思われる。６は半筒形の香炉。畳付及び内面下部は露胎で、それ以外は青磁釉がかかる。７は蜆楽具か。碗の底部を打ち欠き２cm四方に加工されている。碗の見込み部にあった渦福が中心になっている。

８～12は陶器。８は中皿。胎土は白色で軟質であり京焼の可能性がある。内面は黒色釉をベースとし、所々に緑色釉がかけられている。外面の口縁部付近は飴釉である。底部は露胎で、同心円状の擦痕が見られツルツルしている。９は杉形の中碗で、胎土は密で白色を呈する京信系。内外面に細かい貫入が見られ、外面には笹を描いている。高台付近は露胎である。10は半筒形の火入か。内外面に二次被熱を受けており、釉は変質している。口縁端部のみが露胎である。11は水注。外面及び見込みに強い二次被熱を受けている。内面には強い成形痕が見られる。12は灯明受皿である。釉は淡緑色で、在地産と思われる。

13は瓦質の焜炉。口径は復元で25.0cmを測る。口縁端部から外面は丁寧なミガキで、内面は回転ナデ。内面の突起は貼り付けられている。14･15は土師質の皿である。14は二次被熱による付着物がある。

16～20は瓦。16は燻しの右桟瓦片。前端面には、六角形内に「二」の刻印がある。同じ刻印は、浜田城下町遺跡（殿町79番地47）からも出土しており、両資料とも二次被熱により、表面の燻しが剥落し、にぶい黄橙色を呈している。17は施釉の桟瓦片。右桟か。全体に二次被熱を受けており、特に凸面は強い被熱を受けており、溶着物が多く付着している。18は燻しの袖瓦。長さは26.9cmを測る。胎土は白色を呈する。19は燻しで塀瓦か。焼成は普通で胎土は密であるが、器面に石英の粒子が目立つ。凹面は丸みがなく、直線的である。20は加工円盤。燻しの平瓦を加工したものと思われ、表面と側面はミガキが施され平滑になっている。裏面は未調整である。直径は５cm程度で、重量は60gである。21は雁首銭と思われるが、孔は方形であり、金色を呈している。重量は２g。

第６図22は６層出土の陶器の鉢。口径は復元で17.4cm。内外面にオリーブ褐色の釉が施される。在地のものか。

第６図23～38は７層出土。23～32は磁器。23･24は半球形の小碗。23は復元口径8.2cm。見込みに火炎文があり、九陶Ⅴ期（1780～1860）で18世紀後半頃のものか。24は復元口径8.8cm。外面には花文、見込みには五弁花と思われるがコンニャク印判のため潰れている。九陶Ⅴ期（1780～1860）。25は丸形の小碗で、口径8.3cm、底径3.4cm、器高3.8cm。外面のみに植物が描かれる。九陶Ⅴ期（1780～1860）か。26は筒丸形の小碗で、口径6.1cm、底径4.0cm、器高5.0cm。内面口縁部には雷文、外面の口縁部には唐草、体部には面取り内に文字が配される。外面の底部周辺には網目文がある。九陶Ⅴ期（1780～1860）か。27は極小の碗で玩具か。口径は2.8cm、底径1.1cm、器高1.45cmである。28は合子。外面は二次被熱のため、赤絵が黒色となり、器面はざらついている。外面には花などが描かれている。29も合子。外面体部は面取りされており、八角形状となると思われる。各面毎に文様が描かれており、

花や宝が見られる。肩部の蓋との接線には紅が見られる。30は大皿か。底径は復元で15.4cm。内面には櫛歯文や四方襷文などが描かれる、外面にも文様が描かれるが、破片のためモチーフは不明である。畳付以外は施釉される。31は仏飯器で、口径6.0cm、底径3.5cm、器高6.05cm。坏部は上方へ垂直に延び、外面に斜格子文が描かれる。外面底部周辺から露胎となり、高台内の刳り込みはやや浅い。九陶Ⅴ期（1780～1860）か。32は蓋。復元口径は10.6cm、復元つまみ径は4.2cm、器高は2.85cm。内面口縁部は四方襷文がある。外青磁で、18世紀後半のものか。

33・34は陶器。33は萩焼の小皿。口径5.7cm、底径3.6cm、器高2.2cmを測る。内面から外面底部付近までは緑色釉が施される。底部は渦巻状の切り離し痕が見られる。34は半筒形の火入。口縁端部及び内面口縁部周辺のみが露胎である。内外面に細かい貫入が見られ、外面には鉄絵で模様が描かれる。

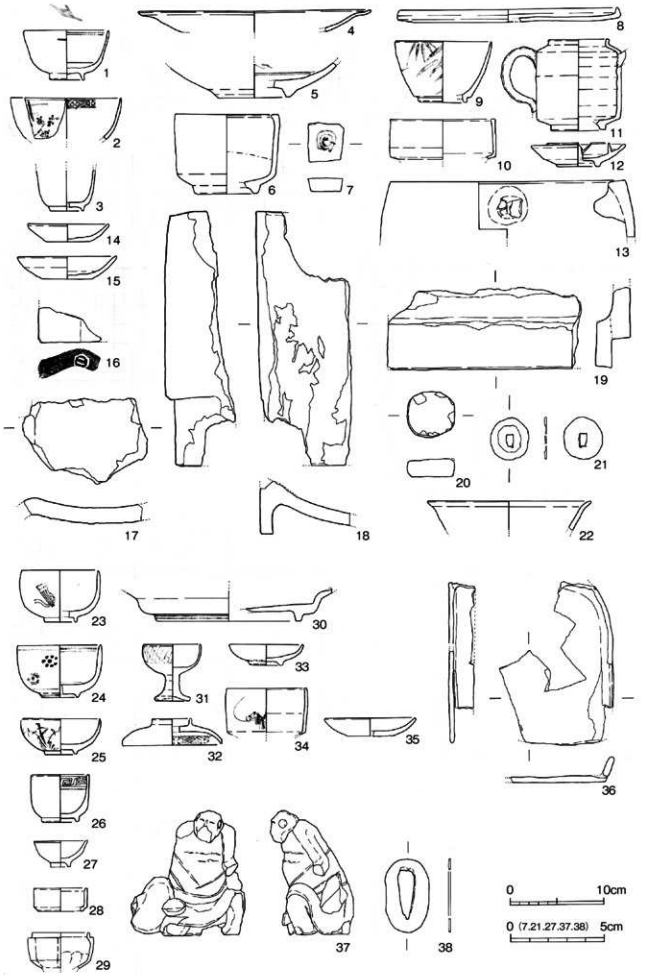
35～37は土製品。35は土師質土器の皿。底部は回転糸切である。36は十能。胎土は粗く２㎜程度の白色粒子や金雲母が目立つ。壁面は粘土帯を貼り付けてつくられている。内外面の所々に煤が付着している。37は土人形。上半身に着衣がなく、袋状のものが見えるため、布袋の可能性がある。着色は見られず、素焼きである。頭部の２か所に貫通しない孔があり、体部は中空である。

38は切羽。長さ3.9cm、幅2.3cm、厚さ0.1cmを測る。長辺側面の片側には凹みがあり、笄を差す箇所となる。側面は凹み部分以外は、極細かい波状になっている。真鍮製か。

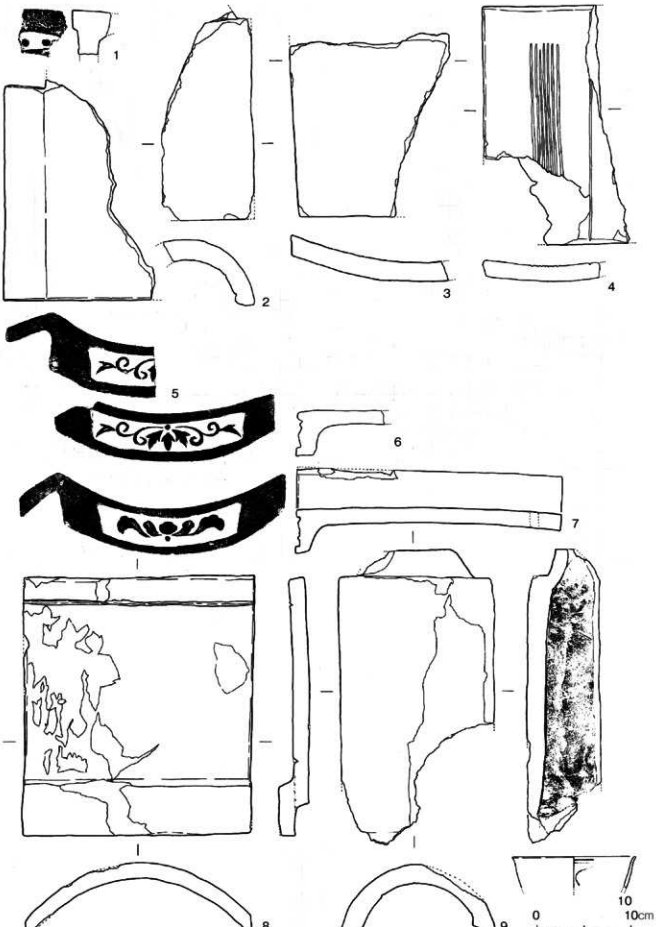
第７図１～８の７層出土の瓦。１は軒丸瓦。焼成は普通で、胎土はやや粗く５㎜大の長石が含まれる。復元で瓦当径は15.0cm、文様区径は11.0cmを測る。瓦当の法量や珠文の形状などから、浜田城跡分類のA－３類Bにあたり、巴巻き方向は左で、珠文数は12である。２は丸瓦。焼成は良く、胎土も密である。凹面は未調整でコビキBが見え、吊紐痕は確認できない。凸面は幅１㎝程度の工具で磨かれている。３は平瓦。焼成は普通で、胎土も密。厚さ2.1cmでやや厚手である。４は分割前の熨斗瓦。凹面には７条１単位の熨斗目がはいる。長さは25.2cm、熨斗瓦１枚分の幅は11.2cmとなる。５～７は石桟の軒桟瓦。５は焼成は良く、胎土は密で白色を呈する。瓦当高は4.8cm、周縁高は0.5cmを測る。中心飾りは珠文を頂点として、先端が三叉になった葉が下向きに三葉展開する。唐草は２転し、端に子葉がある。瓦当にはキラコが確認できる。浜田城跡分類で下向三葉文B類にあたる。６も焼成は良く、胎土も密で白色を呈する。５と同笵である。内区幅は16.4cmを測り、浜田城跡分類下向三葉文B類Bに近いが、三葉にシャープさがなく、浜田城跡下向三葉文B類Bとは同文異笵となる。７も焼成は良く、胎土も密で白色を呈する。長さ28.2cm、幅27.2cm、厚さ1.7cmを測り、釘孔が２か所ある。瓦当は、内区幅が14.9cm、瓦当高4.5cm、周縁高0.4cmである。瓦当文様は橘文と思われるが、中心飾りに蕚がなく、また唐草もないため変容した橘文である。浜田城跡分類の橘文B類に相当する。瓦当にはキラコが確認できる。８は雁振である。焼成は良く、胎土も密である。長さ27.5cm、幅24.0cm、厚さ1.6cmを測る。凸面の後側に１条の沈線がはいり、滑り止めの役割と考えられる。

第７図９は８層出土の丸瓦である。焼成は普通で、胎土はやや粗く１～３㎜程度の長石を含む。凹面は未調整で吊紐痕が見える。凸面は幅1.5cm程度の縦ミガキが施される。残存長31.3cm、幅16.5cm、高さ7.8cm、厚さ2.0cmである。

第７図10は９層出土の肥前系磁器の中碗である。内面に文様が描かれる。口縁部は端反であり、19世紀前半以降である。



第６図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）出土遺物実測図１（S=1/4・S=1/2）



第７図　浜田城下町遺跡（殿町78番地２）出土遺物実測図２（S=1/4）

第４章　自然科学分析

渡辺　正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

第１節　はじめに

本報は浜田城下町の江戸時代の景観（古植生）を明らかにする目的で、文化財調査コンサルタント株式会社が、浜田市からの委託を受け、実施・報告した調査報告書を再編したものである。

浜田城下町遺跡は、島根県西部浜田市旧市街地に広がる遺跡であり、浜田川河口域の沖積平野上に立地する。今回は発掘調査の実施された殿町78番地２を調査対象とした。

第２節　分析試料について

浜田市教育委員会文化振興課との協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が分析試料の採取を行った。図１、図２に調査トレンチ平面図及び試料を採取した北壁断面図を示す。これらの平面図及び断面図は、浜田市教育委員会文化振興課より提供を受けた原図をもとに作成した。

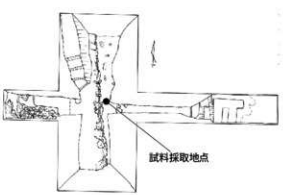


図１　調査区平面図（試料採取地点）

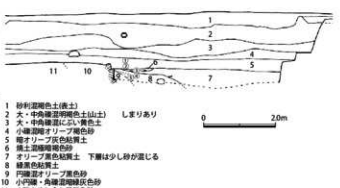


図２　調査区北壁断面図（試料採取位置）

第３節　分析方法

(1) 微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を５段階で示した。

(2) 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分した。

第４節　分析結果

(1) 微化石概査結果

微化石概査結果を表１に示す。

全ての試料で花粉化石の検出量は多く、微粒炭、珪藻も多く含まれていた。一方、植物珪酸体の含有量はやや少なかった。

表１　微化石概査結果

試料No.	花　粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
1	◎	◎	△	◎	△×	×
2	◎	◎	△	◎	△	△
3	◎	◎	△	○	△×	△×
4	◎	○	○	△	×	×
5	◎	◎	△	△	△×	△×

凡例 ◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　×：検出できない

(2) 花粉分析結果

分析結果を図３の花粉ダイアグラム、表２の検出花粉組成表に示す。

花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率(百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。)を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量（湿潤試料１g中の粒数）を算出し、変化を示している。

表２　検出花粉組成表

		5層				7層		8層			
試料No.		1		2		3		4		5	
3	*Podocarpus*	マキ属				1	0.4%				
5	*Abies*	モミ属	1	0.4%	2	1.0%	1	0.4%		1	0.5%
10	*Tsuga*	ツガ属	1	0.4%	2	1.0%					
21	*Pinus (Diploxylon)*	マツ属（複維管束亜属）	201	83.4%	166	79.8%	202	81.1%	231	84.6%	171	85.5%
32	*Cryptomeria*	スギ属	15	6.2%	11	5.3%	18	7.2%	19	7.0%	11	5.5%
41	Cupressaceae type	ヒノキ科型	1	0.4%			1	0.4%				
62	*Pterocarya—Juglans*	サワグルミ属−クルミ属			1	0.5%	1	0.4%	1	0.4%		
71	*Carpinus—Ostrya*	クマシデ属−アサダ属	2	0.8%	1	0.5%			2	0.7%		
73	*Corylus*	ハシバミ属					1	0.4%	1	0.4%		
74	*Betula*	カバノキ属	2	0.8%								
83	*Quercus*	コナラ亜属	13	5.4%	14	6.7%	12	4.8%	4	1.5%	10	5.0%
84	*Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属	3	1.2%	1	0.5%	3	1.2%	2	0.7%	2	1.0%
85	*Castanea*	クリ属					1	0.4%	1	0.4%		
92	*Ulmus—Zelkova*	ニレ属−ケヤキ属			3	1.4%						
94	*Celtis—Aphananthe*	エノキ属−ムクノキ属	1	0.4%	6	2.9%	5	2.0%	11	4.0%	3	1.5%
97	Moraceae—Urticaceae	クワ科−イラクサ科					1	0.4%				
132	*Zanthoxylum*	サンショウ属	1	0.4%	1	0.5%						
160	*Ilex*	モチノキ属					1	0.4%			1	0.5%
205	*Aucuba*	アオキ属							1	0.4%		
220	Ericaceae	ツツジ科					1	0.4%			1	0.5%
301	*Typha*	ガマ属			1	0.5%						
311	Gramineae (<40)	イネ科（40ミクロン未満）	60	24.9%	15	7.2%	17	6.8%	4	1.5%	6	3.0%
312	Gramineae (>40)	イネ科（40ミクロン以上）	107	44.4%	82	39.4%	41	16.5%	25	9.2%	25	12.5%
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	0.8%	2	1.0%	9	3.6%	1	0.4%		
416	*Echinocaulon—Persicaria*	ウナギツカミ節−サナエタデ節			1	0.5%						
420	*Fagopyrum*	ソバ属	1	0.4%	1	0.5%	1	0.4%				
422	Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科	2	0.8%	5	2.4%	12	4.8%	4	1.5%	5	2.5%
430	Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	0.4%	1	0.5%						
450	Ranunculaceae	キンポウゲ科					1	0.4%				
461	Cruciferae	アブラナ科			1	0.5%	6	2.4%	9	3.3%	1	0.5%
502	*Vicia*	ソラマメ属	1	0.4%								
616	Solanaceae	ナス科							1	0.4%		
632	*Justicia*	キツネノマゴ属							1	0.4%		
636	*Plantago*	オオバコ属					1	0.4%				
651	*Patrinia*	オミナエシ属			1	0.5%						
710	Carduoideae	キク亜科	1	0.4%	2	1.0%	2	0.8%			1	0.5%
712	*Artemisia*	ヨモギ属	5	2.1%	8	3.8%	6	2.4%	2	0.7%	3	1.5%
720	Cichorioideae	タンポポ亜科	1	0.4%	4	1.9%	5	2.0%				
850	*Ophiopogon*	ハナヤスリ属									1	0.5%
875	*Davallia*	シノブ属	1	0.4%			1	0.4%			1	0.5%
881	Pteridaceae	イノモトソウ科	2	0.8%					1	0.4%		
886	Aspid.—Asple.	オシダ科−チャセンシダ科	3	1.2%	10	4.8%	9	3.6%	1	0.4%	2	1.0%
891	Polypodiaceae	ウラボシ科			1	0.5%					1	0.5%
898	MONOLATE—TYPE—SPORE	単条溝胞子	14	5.8%	18	8.7%	5	2.0%	5	1.8%	1	0.5%
899	TRILATE—TYPE—SPORE	三条溝胞子	13	5.4%	19	9.1%	7	2.8%	6	2.2%	5	2.5%
木本（計算根）		219	48.1%	181	47.6%	223	59.9%	250	75.1%	183	72.6%
木本（広葉樹）		22	4.8%	27	7.1%	26	7.0%	23	6.9%	17	6.7%
草本・藤本		181	39.8%	124	32.6%	101	27.2%	47	14.1%	41	16.3%
胞子		33	7.3%	48	12.6%	22	5.9%	13	3.9%	11	4.4%
総数		455		380		372		333		252	
含有量（粒数/g）		21,234		19,237		8,526		32,611		9,480	

左よりカウント粒数、百分率

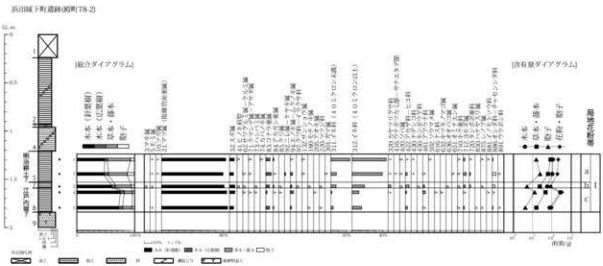


図3　花粉ダイアグラム

第5節　局地花粉帯の設定

得られた木本花粉化石群集にはほとんど変化がなく、全体をⅠ帯とした。また、草本・藤本花粉の割合、特にイネ科（40ミクロン以上）が上位に向かい増加すること、試料№3より上位で草本・藤本花粉の種類数が増えることから、上部（試料№1、2）をa亜帯、中部（試料№3）をb亜帯、下部（試料№4、5）をc亜帯とした。

第6節　従来の花粉分析結果との比較・対比と堆積時期

浜田城跡・浜田城下町遺跡での花粉分析の既存報告には、渡辺（2007）：浜田城庭園跡、渡辺（2012）：殿町79－47（浜田城内堀）がある。いずれもマツ属（複維管束亜属）の高率での出現で特徴付けられ、主要な部分は江戸時代の浜田城下及び周辺地域の古植生変遷を示していると考えられている。ただし浜田城庭園跡の分析では、スギ属が高率になるなど、中世以前の植生を示していると考えられる花粉化石群集も得られていた。

今回の分析結果でマツ属（複維管束亜属）が高率を示すものの、浜田城庭園跡、浜田城内堀の分析結果を大きく上回る割合であった。一方で、浜田城庭園跡や内堀では草本・藤本花粉、胞子の割合が高く、木本花粉ではスギ属の出現率も高かったが、今回（外堀）の分析結果ではスギ属は10%未満で、木本花粉の割合も50%以上、特に下部では80%程度と高い割合を示した。また、木本花粉の割合の低下とともに、イネ科（40ミクロン以上）の割合が増加した。

内堀の分析結果は浜田城築城直後の植生を示していると考えられ、今回（外堀）の分析結果はしばらくしてからの植生を示していると考えられる。

第7節　古環境（堆積環境、古植生）の推定

(1) 堆積環境

現在の地形から考えると、過去（中世以前）の浜田川の流路は、市役所東側辺りから北上して（あるいは西に行く流れと北上する流れに分かれ）、松原浦に抜けていた可能性がある。浜田川の河口に形成されたのが松原浦の砂州で、調査地点周辺は砂州で隔てられた、河口域の小規模な海跡湖（沼沢地・湿地）の一部であったと考えられる。この沼沢地・湿地は中世末までには埋まり（あるいは埋め立てられ）、わずかに残った（意図的に残した）流路を利用して浜田城の内堀、外堀が設置された可

能性が指摘されている（渡辺2012）。

浜田城下町絵図（浜田城下町絵図　貞享3（1686）年以前：浜田市教育委員会）にもあるように、浜田城庭園跡の対岸には田畑が広がっていたほか、浜田川の川筋沿いにも田畑が散在していた。また浜田城庭園跡の池は浜田川から直接取水されていることから、この影響で浜田城庭園跡の分析結果では（イネを多く含む）イネ科（40ミクロン以上）花粉の検出量が多かったものと考えられる。一方、城下町形成後の内堀、外堀は松原浦側から導水されていたようである。城下町初期の植生を示す内堀の分析結果でイネ科（40ミクロン以上）が高率であることから、（絵図に描かれる以前）侍町が形成されるまでは周辺に田畑が存在した可能性が指摘できる。一方、浜田川（からの導水があり、）川沿いの田畑に由来するイネ科（40ミクロン以上）花粉に由来した可能性も推定できる。その後（今回のⅠ帯c、b亜帯の時期）、侍町が形成されるとイネ科（40ミクロン以上）花粉は低率になる。

a亜帯の時期（5層）再びイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率に転ずる。江戸時代に外堀東岸にあった侍屋敷は明治時代初期には水田に変わっており、5層はこの時期の水田耕土であったと考えられる。

内堀、外堀への浜田川からの導水については、珪藻分析（あるいはCNS分析）がなされれば明らかになる可能性がある（浜田川が汽水を示すために、導水があっても判別が困難な可能性もある。）。今後、これらの分析が待たれるところである。

⑵ 古植生

外堀は屋敷地に面していたと考えられ、近辺に森林が迫っていたとは考えにくい。したがって、木本花粉の多く（特にマツ科、スギ属、ブナ科の風媒花粉）は、城山や浜田平野背後の丘陵から中国山地に由来すると考えられる。一方で、草本・藤本花粉、胞子や一部の木本花粉（アオキ属やツツジ属など）は外堀内あるいは近辺、外堀に面した屋敷地内に生育していたと考えられる。

①丘陵の植生

調査地周囲の丘陵はアカマツを主体とし、ナラ類を伴う二次植生（薪炭林）で覆われていたと考えられるが、クロマツ海岸林の影響も示唆される。一方平野の南側に広がる中国山地には、カシ類にモミ、ツガ、ヒノキを混淆する照葉樹林が広がっていたと考えられる。浜田城庭園跡や内堀の分析結果ではスギ属が卓越する傾向にあり、浜田川沿いの湿地や谷沿いにスギが生育していたと考えていた（渡辺2007）が、今回の分析は浜田城庭園跡や内堀の時期よりやや新しく、スギは調査地周囲の丘陵を刻む谷筋や浜田川沿いの湿地に僅かに残存していたものと考えられる。

②近隣の植生

前述のように外堀は屋敷地に面していたと考えられ、得られた草本・藤本花粉、胞子の多くは外堀内あるいは近辺、外堀に面した屋敷地内に生育していたと考えられる。外堀内にはガマ類やアシなどが、近辺にはアカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属の草本が生育していたと考えられる。また屋敷地内では畑作が行われていること、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科は栽培されていた可能性も指摘できる。

b、a亜帯の時期になるとイネ科（40ミクロン以上）が増加し、ソバ属、ソラマメ属などの栽培種も検出される。5層（a亜帯）は堆積状況からも水田耕土と考えられ、ソバ属やソラマメ属も裏作や畦で栽培されていたものと考えられる。4層（b亜帯）は江戸時代の堆積物と考えられ、屋敷地内での耕作も考えられる。一方、根などによる生物擾乱によって、上位の作土から混入した可能性もある。

第8節　まとめ

浜田城遺跡発掘調査に伴い検出された外堀の堆積物を対象とした、花粉分析を行った。この結果、以下の事柄が明らかになった。

(1) 花粉分析結果から局地花粉帯を設定した。マツ属（複維管束亜属）が全体に高率を示すことから全体をⅠ帯とし、草本・藤本花粉の出現傾向からa～c亜帯に細分した。

(2) 得られた花粉化石群集を浜田城庭園跡（渡辺2007）、浜田城内堀（渡辺2012）の分析結果と比較した。既知の結果が浜田城下町初期の植生を示唆していることに対し、今回の結果はその後の植生を示唆すると考えられた。

(3) 外堀の導水は初期は松原浦からなされていたが、途中で浜田川からの導水も加わった可能性が示唆された。このことを証明するためには、珪藻分析（あるいはCNS分析）が必要である。

(4) 浜田城下町及び周辺の古植生を推定した。主な事柄を以下に示す。

①城山や平野背後の丘陵、山地はアカマツを主体としナラ類を伴う二次植生（薪炭林）で覆われていた。一部ではクロマツ海岸林の影響も指摘できる。一方中国山地には、カシ類に針葉樹を混淆する照葉樹林が分布した。さらに、中世以前に平野部で多く認められたスギ林が僅かに残存していた。

②外堀内にはガマ類やアシが生育していたと考えられる。アカザ科－ヒユ科、アブラナ科には畑作物も含まれることから、外堀に面した屋敷地ではこれらが栽培されていた可能性も指摘できる。更に後半には、ソバやソラマメが栽培されていた可能性も示唆されるが、明治期の耕作土からの生物擾乱による混入の可能性もある。

【引用文献】

中村　純1974「イネ科花粉について とくにイネを中心として」『第四紀研究』13巻4号 187－197

渡辺正巳2007「浜田城庭園跡発掘調査における微花石分析」『浜田城跡（庭園跡の調査1）御便殿取得活用に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』18－23　浜田市教育委員会

渡辺正巳2010「花粉分析法」『必携 考古資料の自然科学調査法』174－177　ニュー・サイエンス社

渡辺正巳2012「浜田城下町遺跡発掘調査に伴う自然科学分析」『島根県浜田市遺跡地図Ⅳ（弥栄自治区）・浜田城下町遺跡試掘調査』57－60　浜田市教育委員会

第５章　総括

今回の調査結果と浜田城跡や浜田城下町遺跡の既往調査結果を比較してみる。石垣の築石については、浜田城跡と外堀石垣とも流紋岩主体であり同様である。一方で裏込石には違いが見られ、浜田城跡は築石と同様の流紋岩の小角礫であるのに対して、外堀石垣は円礫が主体となっている。浜田城跡は築石加工の際に産出した石材を、外堀は海浜や河原で採取した石材を利用していると考えられ、ともに立地条件に適った石材選択をしていると思われる。

遺物に関しては、５～７層より二次被熱を受けた瓦や陶磁器が少量出土し、これらは遺物の年代から慶応２年（1866）の石州口の戦いの際に被熱を受けたものと思われる。一方で同じ屋敷地内にある浜田城下町遺跡（殿町79番地47）からは、二次被熱を受けた遺物が焼土層とともに多量に出土している。同じ敷地内において差が見られるのは、本調査地がその後に水田となることに起因する可能性もあるが、幕末に焼けた屋敷の片づけが主に西側で行われていたことも考えられる。

自然科学分析からは、花粉分析により各層の時期批准の参考資料が得られた。即ち、局地花粉帯a亜帯の５層は、下層に比べてイネ科の花粉が増加しており、明治期の水田化の様相を示している。局地花粉帯b亜帯の７層や局地花粉帯c亜帯の８層ではイネ科の花粉量が少ないため、江戸時代の堆積と推定され、畑作物も含まれるアカザ科・ヒユ科やアブラナ科の花粉が見られることから、屋敷地においてこれらが栽培されていた可能性が示唆されている。また、下層においても木本花粉ではスギ属よりもマツ属の花粉が多く、スギ属が卓越し近世初頭の様相を示す浜田城跡庭園跡や浜田城下町遺跡（殿町79番地47）とは異なる。外堀は浚渫が行われていただろうが、近世になるとマツが多くなるという全国的な傾向からみても、８層は近世初頭よりも下がった時期に相当すると推定される。

本調査の大きな成果は、外堀の軸が正方位から10度程度西に傾いていることが判明したことである。同様の軸は、浜田川より北側の侍屋敷地において市道浜田228号線南側（近世：祇園通り）などで確認できていたが、初めて江戸時代の遺構により城下町建設プランの一端を示す資料が得られたことになる。また、外堀の石垣は明治時代の水田化により破壊され、その水田は外堀をまたぐように作られている。これは、明治時代において新たな地割を採用したと結果と推定される。浜田市街地は慶応２年（1866）の戦火及び明治５年（1872）の浜田地震により、壊滅的な被害を受けており、今回の調査結果は近代浜田の歩みの一つを捉えることにもなる。

本調査により、浜田城跡を含めた城下町の構造を知る上で重要な知見を得ることができたと考えられ、失われつつある近世浜田城下町をより詳細に検証することも今後の課題となってくる。

【参考文献】
江戸遺跡研究会編2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
九州近世陶磁器学会2000『九州陶磁の編年』
東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会1992『東京都新宿区内藤町遺跡』
浜田市1973『浜田市誌』下巻
浜田市1982『写真集　はまだ』
浜田市教育委員会1999『松平周防守家の成立と浜田』浜田市世界こども美術館
浜田市教育委員会2012『島根県浜田市遺跡地図Ⅳ（弥栄自治区）・浜田城下町遺跡試掘調査』
浜田市教育委員会2015『平成26年度浜田市内遺跡発掘調査報告書（県指定史跡浜田城跡・松原遺跡）』
浜田市教育委員会2020『城山公園整備事業に伴う 県史跡 浜田城跡発掘調査報告書』
平田正典1979『石見粗陶器史考』石見地方史研究会

陶磁器・土器観察表

挿図番号	層序	種別	器種	法量（cm）			備　考
				口径	底径	器高	
第6図1	5層	磁器	小碗	(9.0)	(3.5)	5.2	肥前系　丸形　外面：文様不明
第6図2	5層	磁器	中碗	(11.7)	—	【4.35】	肥前系　漆接ぎ　内面：口縁部四方襷文　外面：梅　九陶Ⅱ期（1690～1780）
第6図3	5層	磁器	碗	—	(3.6)	【4.2】	肥前系　筒形　漆接ぎ
第6図4	5層	磁器	中皿	(24.6)	—	【2.25】	肥前系　内面：如意雲・渦　外面：如意雲・唐草・宝珠
第6図5	5層	磁器	皿	—	(7.6)	【3.5】	肥前系　蛇の目釉剥　九陶輻年Ⅱ～Ⅲ期（1610～1690）
第6図6	5層	磁器	香炉	(11.0)	(6.6)	8.4	半筒形
第6図7	5層	磁器	娯楽具	—	—	—	肥前系碗の二次加工品　2cm四方　渦福
第6図8	5層	陶器	中皿	(23.2)	(20.0)	1.3	京焼か
第6図9	5層	陶器	中碗	(10.2)	(5.0)	6.4	京信系　杉形　外面：笹
第6図10	5層	陶器	火入?	(11.2)	—	【4.2】	半筒形　全体に二次被熱
第6図11	5層	陶器	水注	6.4	5.6	9.5	全体に二次被熱　特に見込部と外面に強い二次被熱
第6図12	5層	陶器	灯明受皿	(10.0)	(4.6)	2.4	在地系
第6図13	5層	瓦質土器	焜炉	(25.0)	—	【6.0】	
第6図14	5層	土師質土器	皿	8.5	4.6	1.9	全体に二次被熱　底部回転糸切
第6図15	5層	土師質土器	皿	10.5	5.5	2.4	底部回転糸切
第6図22	6層	陶器	鉢か	(17.4)	—	【3.2】	在地系
第6図23	7層	磁器	小碗	(8.2)	(3.4)	5.45	肥前系　半球形　内面：見込み火炎文　外面：吉祥文（琴か）　九陶V期（1780～1860）
第6図24	7層	磁器	小碗	(8.8)	(3.9)	5.55	肥前系　半球形　内面：見込み五弁花　外面：花文　九陶V期（1780～1860）
第6図25	7層	磁器	小碗	8.3	3.4	3.8	肥前系　筒丸形　外面：植物　九陶V期（1780～1860）か
第6図26	7層	磁器	小碗	6.1	4.0	5.0	肥前系　筒丸形　内面：雷文　外面：唐草文・網目文、面取り内に文字　九陶V期（1780～1860）か
第6図27	7層	磁器	極小碗	2.8	1.1	1.45	肥前系　玩具か
第6図28	7層	磁器	合子	(5.6)	(4.8)	2.4	肥前系　外面に二次被熱
第6図29	7層	磁器	合子	(6.0)	—	【3.8】	肥前系　外面：面取り内に花・宝　肩部に紅　体部は八角形
第6図30	7層	磁器	大皿	—	(15.4)	【3.2】	肥前系　内面：櫛歯文・四方襷文、見込みは唐草か　外面：文様不明
第6図31	7層	磁器	仏飯器	6.0	3.5	6.05	肥前系　外面：斜格子文　九陶V期（1780～1860）か
第6図32	7層	磁器	蓋	(10.6)	(4.2)	2.85	肥前系　外青磁　内面：四方襷文　九陶Ⅳ期（1690～1780）
第6図33	7層	陶器	小皿	5.7	3.6	2.2	萩焼　底部は渦巻状の切り離し
第6図34	7層	陶器	火入	(8.6)	—	【4.95】	半筒形　外面：鉄絵で植物?
第6図35	7層	土師質土器	皿	(9.6)	(5.0)	1.9	底部回転糸切
第6図36	7層	土器	土鍋	—	—	—	内外面に煤付着
第7図10	9層	磁器	中碗	(13.0)	—	【3.4】	肥前系　端反形　内面：文様不明　九陶V期（1780～1860）

※（　）は復元値、【　】は残存値

金属製品観察表

挿図番号	層序	種類	法量（cm）			重量（g）	備考
第6図21	5層	雁首銭	2.25×2.1		厚 0.1	2	キセルの雁首を潰したもの
第6図38	7層	切羽	長 3.9	幅 2.3	厚 0.1	4	笄のための凹みあり

土製品観察表

挿図番号	層序	種類	法量（cm）	重量（g）	備考
第6図37	7層	人形	高3.6.6　幅【6.0】	63	布袋か　手づくね　頭部に穿孔2か所　中空

※【　】は残存値

軒丸瓦観察表

挿図番号	層序	器種	瓦当部法量（cm）			長さ（cm）	丸瓦部法量cm）		焼成	胎土	備考
			外径	文様区径	周縁高		厚さ	高さ			
第7図1	7層	軒丸瓦	(15.0)	(11.0)	0.5	【4.1】	—	—	普通	やや粗い　5㎜大の長石含む	浜田城跡軒丸分類A-3類B

※（　）は復元値、【　】は残存値

軒桟瓦観察表

挿図番号	層序	器種	瓦当部法量（cm）				長さ（cm）	平瓦部厚さ(cm)	焼成	胎土	備考
			幅	内区幅	高さ	周縁高					
第7図5	7層	軒桟瓦	【16.0】	—	4.8	0.5	【23.3】	1.4	良	密	右桟　下向三葉文B類（唐草2転）　瓦当にキラコ
第7図6	7層	軒桟瓦	【23.0】	16.4	4.9	0.5	【9.3】	1.5	良	密	右桟　下向三葉文B類（唐草2転）　瓦当にキラコ
第7図7	7層	軒桟瓦	27.2	14.9	4.5	0.4	28.2	1.7	良	密	右桟　橘文B類　瓦当にキラコ　釘孔2か所

※【　】は残存値

軒瓦以外観察表

挿図番号	層序	器種	法量（cm）			焼成	胎土	備考
			長さ	幅	厚さ			
第6図16	5層	桟瓦	【3.7】	【6.6】	1.6	良	密　1㎜以下の白色粒子を多く含む	右桟　二次被熱あり　前端面に刻印（六角形内に二）
第6図17	5層	桟瓦	—	—	1.7	良	やや粗い　1㎜程度の黒色･白色粒子含む	右桟　施釉瓦　二次被熱あり
第6図18	5層	袖瓦	26.9	【9.5】	1.4	良	密　凹面の剥離多い	
第6図19	5層	塀瓦	【8.7】	【20.7】	1.8	普通	密　表面に石英の粒子が目立つ	アールがない
第6図20	5層	加工円盤	直径　5.0		1.8	良	密　1㎜程度の黒色粒子を含む	平瓦の二次加工品　破面はミガキにより平滑
第7図2	7層	丸瓦	【21.9】	【9.6】	2.1	良	密	凹面：未調整　凸面：縦ミガキ
第7図3	7層	平瓦	【19.3】	【16.8】	2.1	普通	密　1㎜程度の長石を含む	凹面:中央部ー工具による横ナデ、周辺ー辺に沿ったナデ　凸面:未調整
第7図4	7層	熨斗瓦	25.2	【16.3】	1.6	良	密	割熨斗の分割前　熨斗瓦1枚の幅は11.2cm　7条1単位の熨斗目
第7図8	7層	雁振	27.5	24.0	1.6	良	密	凹面：横ナデ　凸面：横ナデ
第7図9	8層	丸瓦	【31.3】	16.5	2.0	普通	やや粗い　1～3㎜程度の長石を含む	吊紐痕あり　凹面：未調整　凸面：縦ミガキ

※【　】は残存値

出土瓦点数表

出土層位	器種																								合計	
	軒丸瓦		軒平瓦		軒桟瓦		丸瓦		平瓦		桟瓦		平or桟瓦		熨斗瓦		袖瓦		雁振瓦･塀瓦		施釉瓦					
	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)	点数	重量(kg)		
1層			1	0.12			1	0.16					4	0.18							5	0.34	11	0.80		
2層					1	0.10					5	0.38	21	1.48			1	0.10			19	2.22	47	4.28		
3層							4	0.40			4	0.50	17	1.48									25	2.38		
5層					3	0.70	5	0.72			37	5.32	151	11.60	9	1.18	2	1.18	4	1.58	16	1.26	227	23.54		
6層									1	0.30	3	0.22	26	3.02	1	0.28							31	3.82		
7層	1	0.06			8	4.68	31	5.82			40	2.94	131	10.44	11	2.34			4	3.06	6	1.06	232	30.40		
8層							2	1.66															2	1.66		
合計	1	0.06	1	0.12	12	5.48	43	8.76	1	0.30	89	9.36	350	28.20	21	3.80	3	1.28	8	4.64	46	4.88	575	66.88		

出土陶磁器点数表

出土層位	磁器								陶器									瓦質		土器・土製品				合計
	碗類	皿類	鉢類	壺類	瓶類	蓋類	キセル	不明	碗類	皿類	鉢類	壺･甕類	瓶類	水注類	灯明受皿	蓋類	不明	水注類	不明	土師器皿	焙烙	十能	人形	
1層排土	1	1						2												2				6
2層	3		1			1							1											6
3層													1							1				2
5層	15	10	5		1		1	3	6	7	6	7	15	3	2	5	26	1	2	23	2		1	141
6層	1	1	1					1	3				4				4							15
7層	20	3	3	1	2	1		2	6	3	2	6	2	3			10	1		8		2	1	76
9層	1							1																2
合計	41	15	10	1	3	2	1	9		10	8	13	23	6	2	5	40	2	2	34	2	2	2	248

出土金属製品観察表（掲載遺物以外）

種別	層位	種類	直径(㎜)	孔径(㎜)	重量(g)	備考
銭貨	5層	寛永通寳	22.0	7.0	2	新寛永　背文に「元」
銭貨	5層	寛永通寳	22.0	7.0	2	新寛永　背文に「元」
銭貨	5層	1銭	27.5	—	7	明治8年(1875)製

図版1

調査地状況（西から）

調査区設定状況（北西から/平成30年度）

検出石垣遠景（東から/平成30年度）

裏込状況（南から/平成30年度）

石垣近景（東から/平成30年度）

完掘状況（東から/平成30年度）

調査区設定状況（北西から/令和元年度）

調査区南側石垣・裏込状況（東から/令和元年度）

南壁土層堆積状況（令和元年度）

現地説明会風景（令和元年度）

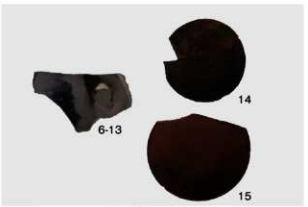
検出石垣状況（南東から/令和元年度）

図版３

５層出土　磁器１

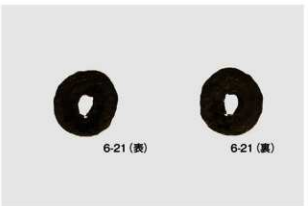
５層出土　磁器２

５層出土　陶器



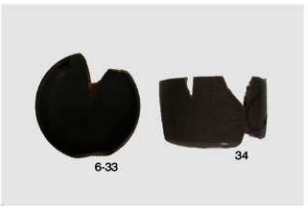
５層出土　土器類

５層出土　瓦



５層出土　雁首銭

６・７層出土　磁器

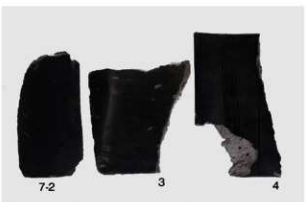


７層出土　陶器

7層出土　土器・土製品

7層出土　切羽

7層出土　軒丸瓦



7層出土　瓦類

7層出土　軒桟瓦

7層出土　雁振瓦

8層出土　丸瓦

9層出土　磁器

報告書抄録

ふりがな	れいわにねんど　はまだしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	令和２年度　浜田市内遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤田 大輔
編集機関	島根県浜田市教育委員会
所在地	〒697-8501　島根県浜田市殿町１番地　℡ 0855-25-9731　bunka@city.hamada.lg.jp
発行年月日	2021年３月

ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
はまだじょうかまち 浜田城下町遺跡 （殿町78番地２）	しまねけんはまだし 島根県浜田市 とのまち 殿町	32202	L277	34° 54′ 00″	132° 04′ 44″	20180912～1116 20190909～1121	21㎡ 36㎡	開発確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はまだじょうかまち 浜田城下町遺跡 （殿町78番地２）	近世城下町	江戸時代	石垣	陶磁器・瓦	浜田城跡の外掘

要約

平成30年度・令和元年度に実施した試掘・確認調査報告を収録。

浜田城下町遺跡（殿町78番地２）では、平成30年度に試掘調査を実施し、浜田城跡外堀の西側石垣を検出した。令和元年度の確認調査では、該当石垣を長さ6.8mの規模で検出し、石垣の軸が西に10度程度傾いていることを確認し、初めて江戸時代の遺構による城下町建設プランを示す資料が得られ、浜田城を含めた城下町の構造を知る上でも、重要な知見を得ることができた。

令和２年度

浜田市内遺跡発掘調査報告書

発行　島根県浜田市教育委員会　2021年３月
島根県浜田市殿町１番地

印刷　弘文印刷

令和2年度　浜田市内遺跡発掘調査報告書（浜田城下町遺跡（殿町78番地2））

二〇二一年三月

島根県 浜田市教育委員会